

鴨川の景観と昭和 10 年 6 月大水害

清貞圭佑

(2020 年入学 4 期生)

はじめに

私は大学二年の時から一人暮らしをしている。大学へ行ったり近所のスーパーマーケットで買い物したりして日々の生活を送っている。そんな中で私は鴨川の美しい景観に視線を奪われることが多い。御蔭橋を渡るときや鴨川の沿道を歩いているとき、思わず写真を撮ろうと思う美しさが鴨川にはある。写真を撮ろうとスマートフォンを構えている人や流れる川に視線を送りながら散歩する人達をみると、鴨川の景観の美しさを改めて感じる。美しい景観を持つ鴨川は、長い歴史を伴って現在の姿になったのである。

鴨川の長い歴史の中でも、現在の形を語る上で最も重要だと考えたのが、昭和 10 年 6 月の大水害だ。今日の鴨川は水害後の改修工事により完成したもので、水害以前とは全く別物と言うことができる。水害前は治水事業が十分に実施されておらず、自然状態に近い河相を呈していた。



大水害前の河川状況

水害前の鴨川水系の河川状況について述べていく。鴨川は栈敷ヶ岳に発し雲ヶ畑からの本流に、鞍馬川と静原川が合流したもので、柘野の北方で京都盆地に流入する。高野川は滋賀県境の途中峠から大原盆地、八瀬に至り、岩倉川や音羽川を合わせて松ヶ崎から盆地に入る。鴨川と高野川の合流は V 字状をなし一直線に南下していく。急傾斜と小流域のため山地の降雨と市内の水位のピーク時との差は 1～2 時間しかない。大正期の鴨川と高野川の合流地点では、鴨川右岸は御土居と賀茂街道の二重堤により堅固に守られている。この南方に都心部が位置するため、京都の生命線として重視された。一方、左岸には堤防がなく幅約 200 メートルの竹林が連続している。これは洪水の流速をおとし、流木や砂礫を堆積させ、流水のみを流し込むための水害防備林である。昭和初期まで、鴨川の左右両岸では差別的な治水が行われてきた。高野川両岸にも堤防はなく竹林を帯状に配置する。高野川の流路からみて、洪水は右岸を直撃する傾向が強い。このため、下鴨の三角地帯は東西両方から洪水が

流入、一時的に湛水させて下流への流水を減ずる遊水池と位置づけられていた。水害危険度は高く、下鴨以外に集落がないのは理にかなった水害回避である。しかし、昭和初期に始まった土地開発により住宅地区に変貌している。

大水害の被害状況

鴨川での被害は、死傷者 12 名、家屋流出 137 棟、家屋全半壊 158 棟、床上床下浸水 24,173 棟である。桂川や天神川などの他河川を含めた場合、死傷者 83 名、家屋流出 187 棟、家屋全半壊 295 棟、床上床下浸水 43,289 棟となる。

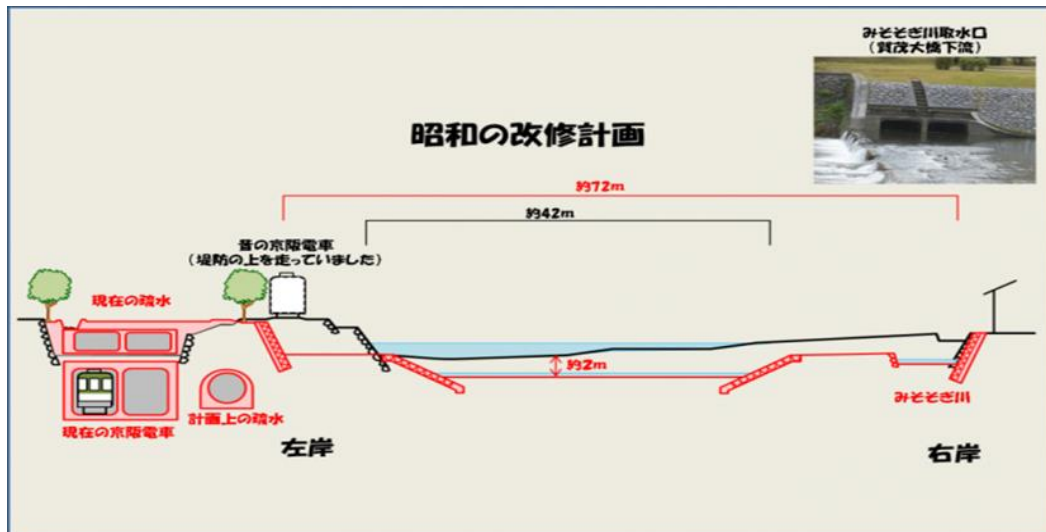


これらの情報は京都府のホームページに記載されている。植村善博氏の『京都の治水と昭和大水害』に記述がある『京都市水害誌』を主な資料とした分析によると、京都府管内では、死者 18 人、負傷者 160 余人に達した。全壊・流出家屋は 276 戸、半壊・反流出家屋は 349 戸で係 625 戸にのぼる。床上浸水は 12,937 戸に達する。その他、道路、橋や堤防、耕地の流出や埋没などによる総被害額は 4,600 万円を上回ると推定している。

鴨川改修

この 6 月の水害と復旧作業中の同年 8 月 10 日の水害によって、河川改修が緊急の課題として再認識された。昭和 11 年から 22 年にかけて、柊野堰堤から桂川合流地点までの約 18 キロメートルと、高野川は山端から鴨川合流地点までの約 5.3 キロメートルについて根本的な河川改修が行われた。具体的な改修内容は、御園橋より上流では、川幅 30～80 メートルを 40 メートル以上の単断面とし、河床を約 2 メートル掘り下げた。御園橋から高野川合流点までと、高野川合流点から二条間は河床を 1.5 メートル掘り下げ、二条から七条間では川幅 60～90 メートルを 70 メートル以上に拡幅し、河床を 1.5～2 メートル掘り下げるなどである。

他には、三条から七条間の京阪電車軌道の設置部で川幅が狭いため、軌道敷を切り取り、川幅を 70 メートル以上に拡幅する改修もあったが、政治・財政上の理由で京阪電車の地下化ができず、暫定改修となった。しかし、昭和 62 年に京阪電車と琵琶湖疏水が地下化され、河川の拡幅が可能になった。



景観について

現在の鴨川の美しい景観は、昭和10年6月の大水害を糧にして造り上げられたものだと考えている。あの大水害があったからこそ、今日の鴨川があるのだ。過去の大水害からは想像できないような落ち着いた様相や、四季折々の花を楽しむことができ、鴨川の川面を眺めながら散策できる「花の回廊」は、人々から親しまれるものとなっている。

冒頭でも述べたように私はこの景観に大変魅力を感じており、鴨川沿いを散歩することもある。私は特に新緑の季節の景色が気に入っている。太陽の光に照らされた葉の緑と、水面から反射した光の組み合わせが綺麗なのである。私のように散歩している人の姿を見かけると、人の生活と自然が一体となっているように感じることができ、自然と調和をとることの大切さを考えさせられる。



鴨川の景観について調べていく中で、昭和 10 年の大水害がいかに重要なものなのかを知り、鴨川について理解を深めることができた。京都に引っ越してきて鴨川の景観の美しさに魅了されたが、あのような大水害が起きていたとは思ひもしなかった。大水害の経験から数多くの人々の努力により、現在の美しい景観をもった鴨川が私たちの世代まで受け継がれてきたのである。私も京都で大学生活を送っている者として、鴨川の景観を守っていくためにできる限りのことをしたい。

参考文献・引用元

植村善博著 京都の治水と昭和大水害【改訂版】 2015 年 文理閣

昭和 10 年の鴨川大洪水とその後の治水対策について／京都府ホームページ (pref.kyoto.jp)
千年の都と京都治水 (img09197.tif (pref.kyoto.jp))

画像

<https://www.pref.kyoto.jp/kyotodoboku/images/daikaisyuu1.jpg>

<https://www.pref.kyoto.jp/kyotodoboku/images/daikaisyuu2.png>